

# 提言

## シーティング技術と作業療法の関係は？

—作業療法士はクライエントの座位環境に責任をもつ

木之瀬 隆 Takashi Kinose

NPO 日本シーティング・コンサルタント協会、理事長  
シーティング研究所、代表



私は1982年（昭和57年）にOTになり、職域病院で義手、筋電義手の臨床に取り組みました。その後、1989年（平成元年）より大学教育へ移り、シーティング技術、義肢装具を中心に福祉用具の講義・研究をしてきました。2012年（平成24年）には大学を早期退職して、日本シーティング・コンサルタント協会の理事長、個人的にはシーティング研究所の代表としてシーティング・コンサルタントの仕事をしています。今回、貴重な誌面をお借りして、表題のシーティング技術と作業療法について考えていることを書かせていただきました。

### ◆ シーティングとの出会い

1988年（昭和63年）の第3回リハ工学カンファレンスで、欧米のシーティング技術と出会いました。国内では当時、子どもの座位保持椅子や車いす等の紹介や講演等が中心で、高齢者のシーティング領域の発表はありませんでした。義肢装具の選定・適合技術と比べると、まだまだ、職人領域の製作技術というものでした。

1989年に「電動車いす」、1990年（平成2年）に「座位保持装置」が補装具種目に入り、公費支給が制度化されたのをきっかけに、「高齢者のシーティング」領域の研究を始めました。特に義肢装具の選定・適合技術は、シーティング技術に活かせることが多くありました。大学では1990年に小児科教授、PT学科講師と一緒に、シーティングシステム研究会を立ち上げ、座位保持装置製作の工房の方々、車いすメーカーと勉強会を始めました。高齢者のシーティングについては、当時の国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所の廣瀬秀行さんと研究を始めました。

### ◆ 座位の解剖学・運動学について

国内では高齢者のシーティングは特に遅れています。理由は簡単で、解剖学、運動学のテキストに座位姿勢の規定がないからです。手元にある『基礎運動学（第6版）』（医歯薬出版、2003）では、座位のことは3行しか記載がなく、基本座位姿勢の規定等は書いてありません。立位や歩行については数十ページにわたり書かれていることと比べると、セラピストが座位姿勢評価を行えないのも当然ということです。基本座位姿勢や座位姿勢の評価については、『地域リハビリテーション』誌（2017年3月号）に書きましたので、関心のある方は御覧いただきたいと思います。

### ◆ OTはクライエントの座位環境に責任をもつ

作業療法は本来、座位においての指導や訓練が基本になります。そのため座位姿勢の安定が得られると作業活動の効率性が高まります。残念ながら現在の回復期リハのOTはマニュアルセラピーで忙しく、シーティングの取り組みは非常に遅れていると思います。

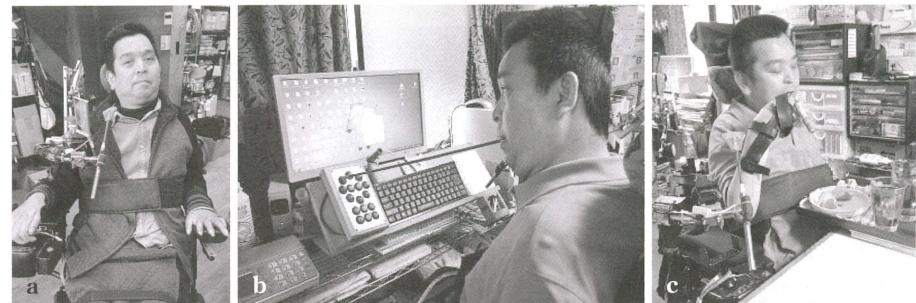


図 シーティングの対応前後

対応前：a：側弯：骨盤傾斜角12度、肩峰ライン-8度、対応後：b：マウススティックにてパソコン入力作業、c：右手で食事ができた瞬間

实用性歩行の難しいケースは何らかのシーティングの対応が必要になります。歩行の難しいケースにはOTが責任をもって対応する必要があると考えています。座位がとれないベッドバウンドのケースには、シーティングの対応すべて座れる可能性があります。このことは地域包括ケアシステムにおける在宅支援につながります。

OTの仕事はクライエントが病気や障害のためにできなくなった「作業」を可能にすることであり、「人-環境-作業」の関係に着目した支援が基本です。環境とはICFの環境因子であり、車いすは身体と接する活動環境になります。シーティングは予防的な視点と合わせて、活動と参加の支援になります。関心ある方はNPO日本シーティング・コンサルタント協会のHPをご覧ください。

### ◆ 「摂食・咀嚼・嚥下」のシーティング

私は、現在、「摂食・咀嚼・嚥下」のシーティングをテーマに臨床と研究を行っています。かんで食べることは座位姿勢の安定性が保たれないとできないことです。シーティングの対応で座位姿勢の改善がみられ、食事動作ができるようになった友人を紹介します（本人より了解を得ています）。

武藤耕造氏は頸髄損傷（C4-5b）レベルの四肢麻痺です。30代で交通事故により受傷されました。このレベルの四肢麻痺の多くは寝たきりで過ごす人も多い

中、自立生活を続けています。今から15年ほど前に、電動車いすにうまく座れないということで、私たちのところに来られ、それ以来シーティングのサポートを続けています。2014年（平成26年）ころから側弯が大きくなり、パソコン入力や食事動作が難しくなったとのことで、シーティングの依頼を受けました。2016年（平成28年）にOT、有限会社さいとう工房エンジニア、座位保持装置メーカーのメンバーでシーティング・チームをつくり支援しました。左凸の側弯のため右に傾き、パソコン入力、食事は介助となっていました。図はチームが3ヶ月かけ調整を行い、正中位の座位姿勢がとれ、パソコン作業、食事動作ができた瞬間です。基本座位肢位がとれることで自立度が大きくなりました。武藤氏は数年前より、自立生活の経験を活かし、障害者のための訪問介護事業所を立ち上げ、さらに今年から新たな訪問看護ステーションを立ち上げる準備をしています。

OTの皆様には、今日から「なぜこの人は座れないのか？」という疑問をもち、作業療法をされることを望んでおります。

\* \*

当協会では今秋、下記のようにシンポジウムを開催します。この機会にぜひご参加下さい。

第13回 日本シーティング・シンポジウム〔会期：2017年11月18日（土）～19日（日）〕、会場：首都大学東京荒川キャンパス、大会長：阿部高家〕